学びの風便り

リーディングスクール通信６８　　R8.11.6(金)

みんミラ

発行：松本市教育委員会　教育研修センター

学びの改革のあゆみ　岡田小学校・梓川小学校

～子どもの姿を真ん中に、学び合う学校づくり　岡田小学校～

先生たちの意識に生まれ始めた変化

岡田小学校では、今年度、木村泰子先生をはじめとする外部講師を招き、インクルーシブ教育や子どもの主体性を引き出す授業づくり、PBS（ポジティブ行動支援）などについて、学びを重ねてきました。

「木村先生に来ていただいたことで、先生方の意識が大きく変わったと感じています」と校長先生。

その変化は、日々の実践の中に表れ始めています。研修に自ら参加し、関連する書籍を手に取って学ぼうとする先生。子どものよさに目を向け、声のかけ方を変え始めた先生。さらには、ユニバーサルデザインについて、先生自身が必要性を感じ、自発的に校内研修を企画する動きも生まれました。

このように、先生方が自分自身の教育観や子どもとの関わり方を問い直し、新たな一歩を踏み出していることが伝わってきます。



子ども・先生たちに話される木村泰子先生

子どもの願いから広がる学び

子どもたちの活動にも、主体性を大切にする取組が広がっています。

例えば、１年生と６年生の交流。これまで一緒に活動してきた６年生に、今度は１年生が「喜んでもらうために何ができるだろう」と考え、自分たちで活動をつくろうとしています。

また、５年生は、来年度の姉妹学級となる保育園の年長児との交流を始めました。保育園に出かけたり、園児を学校に招いたり。３・４年生でも、お祭りやレクリエーションに互いを招き合う活動が生まれています。

こうした取組に共通するのは、教師が用意した活動をこなすのではなく、子どもたちの思いや願いを出発点にしていること。人とのつながりの中で、自分たちにできることを考え、行動する経験が積み重ねられています。

すべての子どもが安心して学べる学校へ

特別支援教育の充実も、岡田小学校が力を入れている取組の一つです。

今年度は、特別支援学級で一人ひとりの子どもに育てたい力や支援の方向性を明確にし、教員間で共有することを進めてきました。通常学級との連携も深まり、子どもの具体的な姿をもとに、必要な支援を語り合いやすくなってきたといいます。

「どの子も安心して過ごし、自分らしく学べること」。これは特別支援教育だけの目標ではなく、岡田小学校が進める学校づくり全体の土台になっています。

「子どもの姿」を真ん中に、先生たちも学び合う

校長先生が、これからの学校づくりについて話されたのが、先生方が互いの実践を語り合うことの大切さでした。これまで多くの研修で学んできたことを、日々の授業で試してみる。そして、「こんな姿が見られたよ」「ここは難しかったけれど、どうすればいいかな」と、気軽に語り合う。そんな営みによって、学校全体がさらに学びを深めていきたいという決意を語られました。今後の授業づくり研修会では、これまで以上に子どもの表情や行動に目を向け、その背景にある思いや学びを先生同士で語り合うことを通して、子どもから学ぶ文化のいっそうの高まりを構想しています。

さらに岡田小では、先生方が子どもについて語り合う時間を確保するため、来年度の時間割の見直しも検討しています。「のびのび・わくわく・どんどん」は、子どもたちだけでなく、先生方の姿にも重なる言葉なのかもしれません。

子どもを信じ、その可能性を見つけ、先生同士が助け合い、学び合いながら新たな実践に挑戦する。岡田小学校では、そんな学校づくりの芽が、少しずつ、しかし確かに育ち始めています。

梓川小学校：子どもの「心の動く瞬間」をもとめて～先生たちの対話と探究の歩み～

梓川小学校では本年度、「その子がその子らしく学ぶ探究的な学びの実現～子どもの心が動く瞬間をもとめて～」というテーマを掲げ、全校をあげて研究・研修に取組んでいます。１学期後半から、先生たちがどのように対話を重ね、授業実践へと繋げてこられたのか、その歩みをご紹介します。

対話から探究の芽が育つ　～ 全学年・専科で紡ぐ探究の歩み ～



７月 13 日、第３回となる校内研修会が開催されました。前半の実践報告では、麻和先生から 23 年間に及ぶ「映画づくり」を通した子どもたちの豊かな心の変容が語られ、清水先生からは「パンづくり」を通して本物の職人さんと出会い、目を輝かせる子どもたちの姿が紹介されました。

後半は、１～６年生および専科の代表７名が実践発表するグループワークを実施。自分が聴きたいブースに集った先生たちは、１学期の取組みの様子や工夫・課題を聴いた後、模造紙を囲み協議しました。「要約せず、ありのままの思いを」という呼びかけに応えるように、会場のあちこちで実感を込めた言葉が飛び交い、実践への思いが紙面上に溢れ出していきました。 研修時間が過ぎても対話の熱気が冷めることはなく、身振り手振りを交えて語り合う先生たちの姿が見られました。その光景を見た山守研究主任は、「時間を過ぎても熱心に対話を続けてくださり本当に嬉しい。模造紙に思いを綴る先生方のパワーとエネルギーはすごいですね」と語り、２学期中間発表会に向けた確かな手応えと対話の大切さを実感していました。

「やってみたい！」が動き出す教室へ　～ 探究的な学びの姿をもとめて ～

８月 31 日（月）、麻布教育ラボ所長の村瀬先生をお迎えし、全クラスの授業参観および校内研修会を実施しました。教室訪問では、１年の図工で輪ゴムの音から「ギターみたい！」とひらめく姿や、３年の算数で自ら電卓を手に取り計算に没頭する姿など、子どもの「やってみたい」を大切にする授業が見られました。

ご講演では、「子どもが自ら動き出す授業づくり」をテーマにお話しいただきました。一方的に知識を教え込むのではなく、「どっち(Which)？」「何(What)？」「どこ（Where）？」といった「W 型クエスチョン」を投げかけることで、思考のスイッチが入ること。「お隣さんとどう思う？」と促せば、教室には「だってさ」「だよね！」と生の声が飛び交い始めること。基礎的な知識であっても、子ども自身が「選び、考え、表現する」プロセスを保証することにより、本質的な概念の理解や確かな学びへとつながることを教えていただきました。

「こうさせなければならない」という教師側の思いを捨て、子ども一人ひとりの可能性を信じて失敗を包み込む土台となること。子どもが主役となり自分の足で走りだしたとき、すばらしい発想や姿が飛び出してくること。今回の訪問を通して、目指すべき探究的な学びの姿を改めて共有する貴重な一日となりました。

子どもの「やってみたい」に寄り添い、共に歩む　～ 探究的な学び　中間発表会 ～



10 月 19 日、「探究的な学び中間発表会」が開催されました。「途中で一度実践を共有し合うことで、活動の修正や新たな視点が得られる」という先生たちの声から生まれたこの企画。会場では前半３グループ、後半４グループの計７グループに分かれ、ポスターセッションやプレゼンを交えた豊かな対話が広がりました。

１年生の国語「くじらぐも」では、本気で雲に乗ろうとする子どもたちの純粋さと、時間の使い方に悩む担任の葛藤に対し、「効率を求めたら探究にならないよ。思い切って時間を使おう」「雲を映像で映したり、トイレットペーパーを繋げたりして体感させると面白い！」と、温かな助言やアイデアが次々と送られました。他のブースでも、子どもたちの「やりたい」を詰め込んだお祭り企画、地域や異年齢との繋がり、ICT の活用法など、授業者自身の「迷い」を起点に多様な議論が展開されました。自分の実践を言葉にすることで頭が整理され、仲間の建設的なアドバイスによって「次はこうしてみよう」と視界が明けていく――。校長先生が「真剣に話し合う先生方に感謝したい。点と点が線でつながり、授業観・子ども観がぐっと膨らむ素敵な時間となった」と振り返られた通り、お互いをリスペクトし高め合う姿が溢れていました。研究主任も「一つの実践や子どもについてじっくり語り合う貴重な機会になり、先生同士も仲良しになるんです」と話されました。

子どもの「やってみたい」に寄り添い「心の動き出す瞬間」をもとめて梓川小のチャレンジは続きます。